

屋久島里めぐり推進協議会

世界自然遺産の島で

《里めぐり》を観光資源に

公益財団法人屋久島環境文化財団 島 幸江



屋久島：周囲126.7km、面積504.86km²、人口12,329人(平成31年4月末現在)。口永良部島と2島で屋久島町を構成。平成5年に日本ではじめて世界自然遺産に登録され、その後永田浜がラムサール条約の登録湿地となった。同28年には周辺海域を含めユネスコエコパークに拡張登録された。

屋久島環境文化村構想と世界自然遺産登録

屋久島は、鹿児島県の大隅半島佐多岬南南西約六〇キロメートルの海上に位置するほぼ円形の島です。九州最高峰の宮之浦岳(一九三六メートル)をはじめ、九州の高峰の上位七座がこの島に集中し、「洋上のアルプス」と称され、屋久島を北限・南限とする生物が生息し、「東洋のガラパゴス」とも呼ばれる自然豊かな島です。

「山に十日、野に十日、海に十日」——屋久島の生活様式を例える言葉です。屋久島は耕作地が少ない一方、外洋に面しているため、毎日、漁に出られるわけでもありません。林業、農業、漁業に取り組んで暮らしてきました。

また、屋久島には「岳参り」という風習があります。春と秋、集落ごとに若者の代表が早朝、海で海水を汲み、そ

れを持ってそれぞれの集落の御岳に登山し、シヤクナゲなどの枝を折って土産に持ちかえります。集落で留守をしている人たちは、詣所で若者を出迎え、その小枝を分けてもらい、各家の床の間に飾ります。岳参りは海と山の幸で生かされていることを人々が確認する行事であり、屋久島の文化を象徴する風習であるといえます。

鹿児島県では、この屋久島の文化や自然の特性に応じた地域づくりを進めるため、平成三年、有識者による「屋久島環境文化懇談会」を設置しました。同懇談会は、元国土事務次官の下河辺淳氏を委員長とし、梅原猛氏、福井謙一氏らをはじめとする有識者と各省庁幹部、町民代表、県知事らを構成員としていました。第一回会合において、委員から屋久島の価値を明らかにするために世界遺産登録を目指すべきとの提案がなされ、懇談会委員と県、町が政府



屋久島の文化を象徴する風習「岳参り」。

この中では、屋久島特有の自然と人間との関わりを「環境文化」と呼び、屋久島にしかない個性的な地域づくりを目指す「環境文化村構想」の理念と事業内容、計画の進め方が示され、この構想を推進する組織として「屋久島環境文化財団」が組織されました。

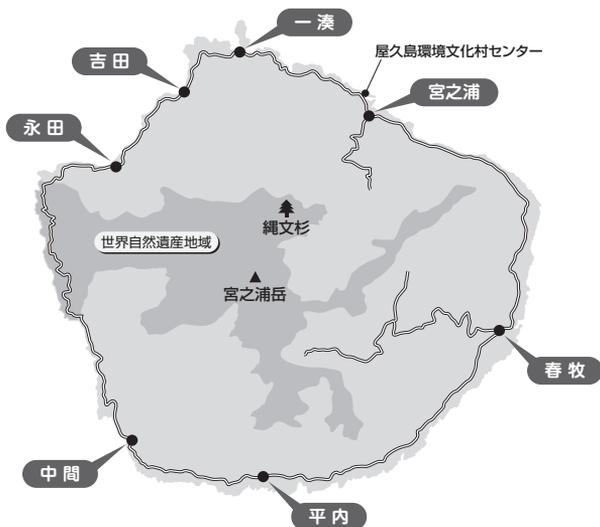
里のエコツアーの誕生

屋久島が世界自然遺産になり観光事業者が増加した一方で、「縄文杉」に代表される山岳部の観光資源への一極集中

に働きかけを続け、世界遺産条約の締結が実現。平成五年一二月、屋久島は、白神山地とともに、我が国で初めての世界自然遺産に登録されました。

環境文化懇談会は、地域住民らで組織した「環境文化研究会」とともに議論を重ね、これらの成果を踏まえて、平成四年に「屋久島環境文化村マスタープラン」を策定しました。

■里めぐりを実施している7集落



登山道の荒廃などの課題も残されました。

山岳部と里部は利用分散という観点においても自然や環境に配慮した新たなシステムを構築する必要がありました。



中間集落での里めぐりの様子。

世界遺産登録の前年に策定されたマスタープランの中に「里のエコツアーの推進」が位置づけられており、そうした背景のもと、屋久島環境文化財団では環境省や屋久島町などと協力し「里のエコツアー」の取り組みを始めました。

屋久島里めぐり推進協議会の結成

平成一六年に「屋久島地区エコツアーリズム推進協議会」が設立され、山岳部利用適正化の検討を進めるとともに、里のエコツアー開発検討を行う「里のモデルツアー作業部会」が設置されました。その後、里地におけるモデルツアーを実施し、意見交換会などを行ないました。さらに、吉田地区では農林水産省の「農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル

事業」に取り組み、コースの設定や語り部の育成などを実施しました。そのほか、まちづくり活性化事業として、公民館活動の一環でまち歩きを行なう集落もありました。

平成二二年から二三年にかけて、行政が屋久島島内の各集落に「里のエコツアー」を提案し、参加を希望した四集落（吉田、宮之浦、平内、中間）の里めぐり団体、屋久島町および屋久島環境文化財団が「屋久島里めぐり推進協議会」を平成二三年一〇月に設立しました。

各集落の団体が参加したのは、「地元を元気にしたい」「伝統文化を語り継ぎたい」という理由からでした。

里めぐり推進協議会の活動

里めぐり推進協議会は、その年の一二月に春牧集落が、平成二七年には永田集落と一湊集落（いっそうしゅうらく）が加わり、現在七集落で構成しています。

屋久島環境文化財団内に事務局を置き、里めぐりの受付、広報などの事務に加え、研修会などの企画を行なっています。

里めぐりの参加者からは一名につき一五〇〇円（小学生五〇〇円、中学生一〇〇〇円）の参加料をいただき、保険料などの手数料を引いた残りを各集落の里めぐり団体へ渡しています。

協議会では総会を毎年行なうほか、研修会、意見交換会を必要に応じて開催しています。

協議会の取り組み

① 広報

ウェブサイトを立ち上げ、リーフレットとポスターを作成し、島内の宿など主要な箇所に配りました。しかし、これだけではすぐには個人客へは浸透していきませんでした。

平成二七、二八年に助成金を活用し、リーフレットのデザインを一新、旅行エージェンツの招致、各旅行ガイドブックなどでの積極的な広報を集中して行ないました。また、町役場の協力のもと、都市圏で修学旅行誘致の説明会を開催しています。

その成果が徐々にあらわれ、平成二七年度に六〇八人、二八年度に六四三人だった参加者が二九年度に七七八人、三〇年度は一四九七人へと増加してきています。

特に旅行会社の年間ツアーとしての利用や、修学旅行、大学の研修などが増えてきています。

② りめぐりの質の向上

語り部の話は大変面白いです。しかし彼らの多くはガイ

屋久島 りめぐり

山に十日、海に十日、野に十日

地元の語り部と巡る

屋久島りめぐりのご案内
 開催集落 永田 吉田 一湊 宮之浦 春牧 平内 中間
 ■参加費 一人 高校生以上1,500円、中学生1,000円、小学生500円
 ■所要時間 2~3時間 ■催行人数 1人~20人
 ■開催時間 お客様の都合を伺い、語り部と相談の上決定します。
 ☆食事付きもあります。(永田 吉田 一湊 春牧 5名以上 追加料金1,000円)

お問い合わせ・お申込み
 屋久島りめぐり推進協議会事務局(屋久島環境文化村センター内)
 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦823-1
 TEL 0997-42-2900 FAX 0997-49-1018 HP <http://www.yakushima.jp>

屋久島りめぐりを案内するポスター。

ド経験がありませんでした。はじめは、相手の反応にかかわらず、知っていることをできるだけたくさん一気に話す傾向にありました。

彼らの話をお客様に適切に伝えるために、専門家を招聘して、インタビューレーション(体験や地域性を重視した解説手法)などの研修をは

じめ、先進地の視察、新人語り部さん向けの研修会開催など語り部の質の向上に努めています。

また、地元の方は史跡や遺跡などを中心にコースを組み立てようとしがちです。一方で、屋久島には地元の方が紹介しきれない昔からの生活様式が残っていたり、屋久島独特の景色があったりもしています。前述のエージェンツモニターツアーでは、観光資源の商品価値について忌憚なく意見を言っていたいただきました。集落の人が気づいていない魅力的な場所についてもアドバイスをいただき、それをもとに一部のコースを見直しました。

現在でも島内外で語り部研修会を実施しており、ガイドの人材育成とスキルアップに取り組んでいます。

③ 体験コースの開発

島で古くから食べている伝統料理や、地元の方が家庭で食べている味を提供するために、永田、吉田、一湊、春牧の各集落では里めぐりと昼食をセットとした食文化コースを用意しています。料理には食材や調理方法についての詳しい解説も添えられ、食を通じて歴史や文化に触れることができます。また、吉田集落のトンボレ（瀬風呂）体験や、中間集落のサトウキビ狩りから黒糖づくりまで体験できるコースなど、里めぐりに体験活動を加えたコースの開発も行なっています。

④ 奄美との連携

鹿児島県内二つ目の世界自然遺産登録を目指している奄美地域にも、まち歩きを行なう団体がいくつもあります。屋久島と奄美がまち歩きを通して連携し、全国に向けて環境文化村（自然と共生する地域づくり）のインパクトある情報発信を行なえるよう、そして交流人口が拡大し、両地区の活性化を図れるよう「奄美・屋久島まち歩き協議会」を平成二九年度に立ち上げました。屋久島里めぐり推進協議会と奄美大島の五団体二個人で構成しており、それぞれの島に事務局を置いています。今後、合同研修会を実施する予

定です。

平成三〇年には奄美と鹿児島を結ぶ航路が屋久島寄港を開始し、両者の連携による双方への効果が期待されています。

各集落の取り組みで島全体を元気に

里めぐりでは、お客様から参加料をいただいています。このことで、語り部さんにも責任感が生じているようです。説明用のパネル入れを手づくりしたり、おもてなし用のタシカンを年間で使えるように冷凍したり、屋久島の伝統菓子を事前に準備するなど、お客様に屋久島を楽しんでもらえるようにと各集落で工夫しています。

また、「里めぐり」について集落の理解がはじめから得られていたわけではありません。しかし、語り部さんたちの「地元を元気にしたい」という想いが徐々に浸透し、里めぐりのコースの周辺を掃除してくれたり、声をかけてくださったり、語り部はできないけど何か協力したいという方々が増え、集落一体となった取り組みになってきています。

語り部の人数は各集落によってまちまちです。少しずつ語り部が増えている集落もある一方、後継者の育成に苦慮している集落もあるのが現状です。

今後、このような取り組みに賛同してくれる集落が増え、屋久島全体で盛り上がっていければと願っています。■

島からのメッセージ

「里めぐり」そのものが集落の宝物

私の住む中間集落は、屋久島の南西に位置する集落であり、秀峰七五岳(1488m)から流れ下る中間川の河口に広がっています。島内でも、年平均気温は高く、雨量が少ない地域です。この良好な気候条件で、かつては良質の黒糖を産していました。また果樹においても糖度の高いものができる地域です。

中間集落の各戸には『屋久町郷土誌』(平成5年から19年にかけて刊行)が置いてあります。しかし、昔の話をする方が少なくなり、方言も日常から消えつつありました。そんな中、行政から「屋久島里めぐり」の話をいただきました。「そんなことして何になるのか」「金になるのか」という住民の意見もありましたが、集落の区長としては、「綱引きなど地域の伝統芸能や行事の継承」を何とかしなくてはとの思いも強くあり、「里めぐり」の取り組みに手をあげました。

まず、地元のお年寄りに話を聞きに行き、古い写真などを集め、郷土史以外の文献を探しました。そして、行政などの支援を受けながら、まち歩きの特設家の方に来ていただき、散策ルートを選定やガイドとしての心構えなどのレクチャー、モニターツアーなどを実施するなど準備を整えてから協議会に参加しました。

最近では、集落の方に協力いただき、サトウキビを手で刈り採り、そのキビを



中間集落をガイドする筆者。

圧縮機にかけて大釜で煮詰める昔ながらの黒糖づくり体験などをオプションとして実施しています。

「里めぐり」の取り組みは、地元の若者たちが集落の伝統文化を改めて知り、良さを見直すきっかけになっています。また、課外授業で「里めぐり」を利用してくれた小学生が興味津々にいろいろな質問をしてきて、それが私にとって勉強となり、集落のことをさらに知る機会となったこともあります。地域の方に「里めぐり」の取り組みへ協力をいただいているところですが、目下の課題は私の後を継ぐ語り部の育成です。

「里めぐり」が始まって7年経ちました。今では「里めぐり」そのものが集落の宝物であり、若者たちへ集落の伝統文化を引き継ぐための最大のツールになっていると確信しています。

(屋久島里めぐり推進協議会副会長／中間区語り部 川崎太一)



島 幸江 (はたけ ゆきえ)

山口県出身。山口大学工学部卒業後、福岡県北九州市で河川環境に関する業務を行なう。平成20年に屋久島に移住。同21年から屋久島環境文化財団で勤務。財団機関誌「屋久島通信」の編集および「屋久島の里」を紹介する記事などの執筆を担当。